

辞典史

資料による中日大辞典編纂所の歴史 6

今泉潤太郎

愛知大学学術代表団の訪中

米国の対中国政策の転換を告げるニクソン大統領の声明は世界を驚愕させた。翌昭和47年(1972)2月にニクソンは訪中し米中会談が実現、その後塵を拝して9月には田中角栄首相が訪中し周恩来総理と会談して日中共同声明の発表となり、日本も国交樹立に舵を切った。喜ぶべきことではあるが、中国と国交回復を望む世論は23年間も無視されてきたのである。米国追従を外交方針の基軸に置く我が国のあり方は遺憾ながら今も昔も変わらない。

鈴木擇郎はかねてから辞典編集上の問題点、疑問点について中国側から意見を聞くことに積極的であった。辞典編纂が始まった昭和30年(1955)12月、中国学術代表団(郭沫若団長)の来日の際には馮乃超副団長(中山大學学長)が多忙な郭の代理として華日辞典編纂視察のため来学した。以来、辞典編纂所は中国側から編纂上の資料の提供を受けるなどの交流が始まった。また鈴木は昭和33年(1958)5月に愛知県平和代表団副団長として訪中し北京でメーデーパレードを参観した際に、天安門回廊の小部屋で慌ただしく郭と挨拶する機会をもったほか、個人的に中国文字改革委員会、中国語言研究所などを訪問し関係者と懇談した。

昭和43年(1968)2月発刊の『中日大辞典』は愛知大学から日中友好協会経由で中国日本友好協会(廖承志会長、郭沫若名誉会長)へ寄贈され、辞典の完成までに受けた多くの厚意に対する謝意と今後より良き辞典にするため

中国側専門家との交流を望む旨の挨拶状が添えられた。交流希望は鈴木が発意によるものであった。ほどなく辞典受贈の謝意が日中友好協会を通して大学に伝えられ、交流については関係方面に伝えたと付言されていた。文化大革命は3年たっても激しきは衰えを見せず、学術的な訪中は難しいと思われた。

昭和46年(1971)9月、細迫朝夫学長は訪中する日中友好協会代表団の穂積七郎前代議員(地元選出社会党)に託して増刷(2刷)したばかりの辞典を郭沫若名誉会長に進呈し、あわせて辞典編集関係者からなる愛知大学学術代表団の訪中要望書を届けてもらった。翌昭和47年1月、中国日本友好協会から愛知大学宛に年賀状が届いた。新年の挨拶に添えて、辞典と書状は郭に届き謝意を伝える旨の文言はあったが、代表団派遣については何の言及もない。前年におきた林彪事件の後処理を終えて鄧小平が復活するなど、やや落ち着きを取り戻した感はあるものの文革は6年目に入りなお進行中であった。ただ多くの党、政府の高級幹部が追放されるなかで郭の健在が確認できたことは嬉しいニュースであった。

同年7月、久曾神昇学長は就任の挨拶を兼ね学術代表団を来年に派遣したい旨の書簡を中国日本友好協会宛に発送した。上述の如く9月に日中国交正常化が実現したことから、訪中の可能性は高まったと考えて鈴木は代表団派遣の準備を急いだのである。中国側からの返事はないまま翌48年(1973)初めに中国日本友好協会宛に年賀状を出すとともに、鈴木を団長とする4名の代表団名簿を付した訪中要望書をあらためて提出した。文革をきっかけに日中友好協会は内部分裂を起こし日中友好を名乗る二つの協会が出現するなど、交流事業にも混乱が生じて今回の要望書は日本中国文化交流協会(中島健蔵理事長)を窓口として提出されることとなった。

前触れのない吉報であった。同年5月、天津の南開大学から愛知大学学術代表団の訪中を歓迎する旨の電報が届いたのである。当時全国的に大学紛争が盛んで愛知大学も例外ではなく大衆団交、本館封鎖、研究館封鎖、学生自治会派对反自治会派の武闘などが繰り返されてきた中での嬉しいニュースであった。

辞典発刊を機に始まった学術代表団の派遣に関連して、前後して起きた編纂所の解散に触れておく必要がある。辞典編纂所の歴史からいって『中日大辞典』発刊が最重要事項であるのは当然であるが、付随したこの問題もまた一大事であった。編纂所の解散は編纂所建物の明け渡しとも密接に関係しているので、まず建物の明け渡しについて説明しておく。

このころ豊橋キャンパスでは教室棟、研究館、図書館など教育、研究関連の建築が相継いだが、事務棟の着工はいつも後回しにされていた。事務用の建物は旧軍隊時代の本館のみで部屋不足は深刻な問題となっており、本館横の編纂所の建物は使い勝手も良く、かねてから事務当局に目をつけられていた。辞典が刊行されるや事務当局から編纂所の建物の明け渡しを迫られた。この決定の詳細は分からぬが事情はよく理解でき建物を明け渡すことに問題はなかった。むしろ建物を明け渡すことができてほっとした。正確に言えば辞典ができ編集が終わったので心底ほっとしたと言うべきであるが。編纂所がなくなりいつも通った仕事場へ行くこともなくなって、初めて編集が終わったことを実感した。

編纂所解散の決定に至る過程はきわめて単純である。編集者側の意向を受けて中日大辞典刊行会が解散を決定し、これを大学当局が了承したものである。解散に伴って主要蔵書は「中日大辞典文庫」として大学図書館に寄贈され、数十万枚の辞典カードも焼却処分され、増刷に必要な編集資料だけが各人の研究室に分配されて全てが片付いた。この時点では将来の全面改訂即ち新版編集への配慮は皆無であり、編纂所の解散がもたらす結果に対する問題意識も希薄であった。これらの問題を多少でも考慮したのなら、編纂所を一時的に他へ移し、設備、備品、蔵書、資料など一切を保存しておく可能性を追求したであろう。本部から離れてはいるが、キャンパスの片隅には旧軍隊の老朽建物が化け物屋敷然と残っており、単に物を置くだけの場所には事足りていたのである。

あっさりとして編纂所を解散することになった主な理由は当時の編集者の心身状態にあると思う。我々は校正から印刷、製本の点検と発刊直前まで編集業務に忙殺され、その合間に講義や教務をこなす日々をおくっていた。眼前

のことを処理するのに手一杯で今後のことを熟考する余裕はなく、いつも焦燥感、切迫感につきまといわれていた。さらに発刊、発売後は辞典の評価や販売などに対する責任感、期待感、不安感など、編集業務上とは異なる別の心的圧力を受けていた。とくに鈴木と内山雅夫は長期にわたる編集をやり遂げ辞典を完成させた満足感、高揚感とともに、多年にわたる辞典編集の重圧から解放された虚脱感、また積年の苦勞で蓄積された疲労感などが混じり合っており、両人とも自覚症状はないが健康に深刻な影響を及ぼしていた。これが数年後に不幸な事実となったことは、まことに痛ましい限りである。

編纂所解散後、辞典室を将来どうするのか私自身はよく考えたことはなかった。辞典が出版されたので今後増刷する際の編集や校正は我々がやる。これは我々の共通認識であり、実際に編纂所が再設置されるまでの数年間におこなった2回の増刷は、各自の研究室を臨時の辞典室として編集業務をおこなったのである。編纂所が解散しても編集が全く無くなるはずがない。

ただ鈴木と内山は辞典の将来について各々の考えがあり、あるいは十分に話し合いをしていたとも思うが確証はない。この頃は本間喜一が辞典刊行会の業務でしばしば辞典室を訪れ鈴木らと相談していた時期にあたる。辞典の発刊、発売と後述する株式会社大安の廃業、破産とともに建物の明け渡し、辞典編纂所の解散や辞典の今後が問題となったに違いない。本間はその際に鈴木と内山の意向を確かめた上で全て了承した。規定の定めるところでは辞典編纂所、編集委員会の設置、廃止は辞典刊行会の権限であり、本間が知らぬ道理はないのである。

当初、華日辞典刊行会は日中友好協会理事長、旧東亜同文書院華語教授など外部の関係者を含んで構成されていたが、辞典発刊後に規約が改正され、本間名誉学長、学長、学部長、鈴木、内山ら編集委員、及び中国関係教員など、全て学内者による役員構成となった。名称も中日大辞典刊行会と改称されたが、その他は従来どおりであった。故に編纂所の解散は刊行会で決定され最終的に大学当局により承認されたのである。

この頃に廃業、破産した大安と辞典の販売についても触れておかねばならない。大安は辞典刊行会からの委嘱を受けて辞典の編集、印刷、発刊、発売

の全てを扱っていたが、昭和43年2月『中日大辞典』の発刊、発売の最中に、廃業、破産問題が起きた。大安の破産は文革と直結した政治色の濃いものであり単純な財務上の問題ではない。この背景には文革前から存在していた日中両国共産党の対立関係があり文革をきっかけにして敵対関係へと激化していった。その結果、日本国内の中国と密接な関係をもつ日中友好協会のような組織、団体、企業から個人間にまで影響が及んだのである。敵対関係が深刻となって抜き差しならぬ羽目に陥り、ついには組織、団体、企業等の分裂となり、これに付随した暴力行為や傷害事件も多発した。

中国書籍専門店である大安もその一例で、社員間の対立激化から営業を停止し遂には廃業、破産となった。このため辞典刊行会は後に東京地裁でおこなわれた大安破産事案の裁判に債権者として関与した。大安の廃業後、小林は燎原を立ちあげ辞典の総発売元を引き継いだ。翌年4月に増刷した辞典第2刷版は燎原の名で出版され、後に旧大安の債務も燎原によって完済された。

『中日大辞典』は刊行以来さいわい世間の好評を得て好調な売れ行きを示していたところ、日中国交回復が実現して中国に対する日本国民の関心は一段と高くなり、中国語学習熱が起これ辞典に対する需要もさらに高まった。取り扱いは大安から燎原へと替わったが辞典の売れ行きに影響はなく極めて順調であった。大手の出版社による出版を断念し、小売書店に過ぎない大安を出版、販売元にして自費出版（本間の言葉では自主出版）すると決めたことに、本間が一抹の不安を持たぬはずがない。それは大手取次が独占する書籍販売流通機構を通さずに独自の販売網を用いて販売する大安の販売方法に起因する。

当時、日本では委託制と再販制のもとに出版物は取次を通して販売され、取次機構が倉庫、配送、店売、集荷、集金などの業務を担っていた。出版物は7社の大手の取次に独占され、うち日販、東販2社によりほぼ8割が占められていた。大安は中国古典や五四時期の雑誌『新青年』の影印本の出版を軌道にのせていたが、本店と支店の店頭売り、ダイレクトメール、大学生協書籍部での販売を主とする小売書店にすぎない。

出版社でない大安は辞典を全国の書店に配本することができない。この間の事情を十分承知していた本間、鈴木は、辞典の売れ行きがまずまず順調であると知り安堵した。しかし地方の本屋はもとより大都市の大型書店の店頭にも置いてないので、『中日大辞典』の発刊を知り購入したい者にとっては不都合きわまりない。最寄りの本屋で店売されていないとか、出版元が不明で取り寄せられないとか、また店頭で実物を手に取ってみたい等々の苦情や要望が編纂所にも多々寄せられた。また大学の事務当局からは大学広報のために辞典を全国の本屋の店頭に配置せよとの声もあがった。どれもこれも皆もったもなことであり、辞典はあるが本屋では買えないのでは話にならぬ。自主出版の厳しさをいまさらながら思い知らされて、悔しさ、歯痒さを覚え腹が立つばかりであった。そのなかで学習、研究、業務関係者など広く中国（語）関連の分野では高い評価を得て、中国関係新刊書の売れ行きトップに連続して名を連ねたことでは、いささか溜飲を下げた。全国の書店での店売は辞典増訂版の刊行以後に実現する。

辞典発刊後は万事が中日大辞典刊行会へと移行し、本間の期待どおりに事態は展開していった。本間は学内の諸星熊造、木田彌三旺、浅野巧美といった同文書院関係の職員に刊行会の業務をまかせた。理事室付きの諸星は本間の指示で辞典刊行会関係の財務を長期にわたって管理した。本間の指示で諸星が作製した辞典損益計算書は每期ごとに辞典刊行会から大学当局へ報告され、さらに税務署へ提出された。印刷部数、販売部数、在庫部数、売掛部数、及び人件費、印刷費、倉庫代、送料、広告費、委託費、資料購入費、消耗品費、原稿カード印刷費など、収支が一目瞭然である。木田は敗戦時の同文書院華語助教授で本間学長の指示を受け、困難で危険な問題の処理に当たり、また通訳としても鈴木とともに中国側の接收委員と対応した経歴を持つ。愛大の創立にも参画したが教職に就かず大学監事となり本間の辞典出版費の調達にも協力した。浅野は大学創設以来、庶務課長として同文書院関係の事務処理を主管した。

こうしてみると原稿カードの作成、編集、出版、販売、経理など全てにおいて、『中日大辞典』は愛知大学の創設に参加した同文書院関係者の手に

よって出来上がったものであり、中日大辞典刊行会による自主出版とはまさにこのことを指すものである。

ここで学術代表団の訪中に話を戻す。辞典の完成を機に中国側の専門家の意見を仰ぎたいとの鈴木への思いが代表団派遣の企画となった。とくに辞典の最終稿の校正段階で文化大革命が始まったため、これに関連する語彙の採録が極めて不満足なものとなり残念に思っていた。同文書院時代から使用する者の立場にたった辞書作りを追求してきた鈴木は、文革の進行につれてこれを痛感していた。

鈴木から辞典に関する代表団派遣の提案をうけて辞典刊行会は検討を重ねた結果、愛知大学が派遣する学術代表団であること、辞典編集に関する座談会（学術研究上の会合も座談会の名で呼ばれた）に限定した訪中であること、文革中のため入国拒否される恐れのないことを選考基準として団員を最終的に決定した。当時の訪中が異常な状態の中でおこなわれたことは前回述べたとおりである（本誌第7号）。鈴木は参加者の範囲を広げて多勢の者に訪中の機会を提供することを目論んだが、結果的には少人数の代表団となってしまった。とりわけ内山の不参加は鈴木にとり極めて不本意なものであった。鈴木は説得に努めたが内山は健康上の理由で参加を固辞した。

ここで鈴木、内山のその後について触れておく。さきに記した両人の心身状態は長く尾を引き甚だしく健康を損なうものとなった。鈴木は代表団長として訪中し精神的に行動した翌49年(1974)3月に胃切除の大手術をおこない、退院して健康を回復するとすぐ辞典編集の再開を企画する。内山、今泉の協力を取り付け本間の賛同を得て鈴木は改訂版編集計画を辞典刊行会に提案し了承を得る。これをうけ大学当局は昭和50年(1975)4月、あらためて辞典編纂所と編集委員会を発足させる。鈴木は大学を退職し、編纂主幹として辞典の編集に専念することとなる。

内山は編纂所の解散後も健康が優れず代表団の訪中にも参加しなかったが、改訂版の編集に参加したものの同年8月に体調を崩して入院し、二十日足らずで病状あらたまり急逝する。辞典完成から編纂所再開までの数年間は内山の健康を回復させるための休養期間とはならなかった。“強い正義感、

責任感を以て世に処すれば、憤りを感じずることは必至であるが、君は憤りを内におさえて行動に発することなく、責任はいささかなりとも尽くさざるところあらんことをこれ恐れていた。”辞典を完成させるために愛知大学に招かれ、その期待に背かず『中日大辭典』を世に出して逝った内山を惜しみ悼む鈴木という言葉は重い。

再び学術代表団の訪中に話を戻す。天津の南開大学は北京の北京大学、上海の復旦大学と並ぶ名門校であり、周恩来総理の母校としても有名である。國務院科教組（文革中の名称）からの通達で、この三校が愛知大学学術代表団を招待し南開大学が責任校として世話をする体制と見受けられた。

代表団の正式名称は愛知大学学術代表団となった。団長は鈴木、団員は池上貞一、中島敏夫、及び今泉である。昭和48年6月15日出国、7月5日帰国、3週間の短い日程であるが実り多い旅であった。東京―北京、大阪―上海間直行便の開通は翌年の秋以降のことで、我々は香港まで飛び一泊し、翌日鉄道で羅湖までいき下車、歩いて出入国手続きのため国境（小さな橋）を渡り深圳に着いた。深圳で出迎えの中国国際旅行社（通訳）に案内され広州へ着き、駅頭で待ち受けた南開大学李何林教授、外事処職員と挨拶を交わした。鈴木と同年輩で著名な文学者でもある李教授が遠路はるばる出迎えてくれたことに驚きと感謝の念を禁じ得なかった。鈴木を団長とする愛知大学学術代表団が重視されていることを知り、責任の重さをいまさらに感じた。なお李教授は入国から出国までの全行程を我々と同行された。

学術代表団の行程と行動は、『愛大通信』に寄せた4名の報告をはじめ他の資料に詳しく述べられている。林彪事件後に実権を握った四人組が批林批孔運動を展開する中での訪中であり、これらの資料を通して当時の文革の一断面を窺い見ることもできよう。

学術代表団は二日間にわたる『中日大辭典』に関する座談会を成功裡に終えたあと、愛知大学から南開大学に対し学術教育交流の提案をおこなった。即ち、1. 南開大学側の来日要請。期間は2週間程度とし日本国内における費用を負担。2. 両校教授の研修への相互援助。3. 両校学生の旅行、短期留学への相互援助。4. 研究上の交流、資料の交換並びに辞典編纂への支援な

ど4項目である。鈴木が中国語でこれを述べると盛大な拍手が起こった。提案内容は南開大学側の一存で即答できる範囲を越えるものであり、まして文革中のことである。ことが簡単に運ぶものではないと承知していたので、好意的な反応に安堵するとともに嬉しくおもった。

その後、予想外に早く翌昭和49年2月（文化大革命終結の3年前）南開大学からの返事が届く。南開大学代表団の訪日、教授、学生の相互研修、留学等は条件が整い始めたいとの内容である。また当面実施可能な資料の交換から始めるとして南開大学学報などの出版物が同封されている。当時中国には私立の大学は存在せず全て国立であり、したがって南開大学の返答は中国政府の承認を得たものと理解される。これより両校の交流は緒に就き、双方の学長が率いる正式な大学代表団の相互訪問が実現したのち、全面的に発展していくことになる。

やがて10年間におよぶ文化大革命も終りを告げ、その4年後の昭和55年（1980）10月、中国側は先に学術代表団が提案した大学間交流を実施すべく、愛知大学代表団（団長久曾神学長）の訪中を歓迎し、愛知大学と南開大学、愛知大学と北京語言学院（現北京語言大学）の学術教育交流協定が締結される。これは国務院教育部（文革終結後もとの名称に戻る）の主導によって実現した日中の大学間で最初の交流協定である。さらに3年後の昭和58年（1983）9月、滕維藻学長を団長とする南開大学訪日代表団の来学が実現する。じつに愛知大学学術代表団の交流提案の10年後のことである。

中日大辞典刊行会の設置目的は二つ、辞典の編集と出版ならびにその利益による日中の研究、教育の交流である。原稿カードの返還交渉から編集、出版、贈呈、南開大学での辞典座談会に及ぶ双方の信頼関係の所産である『中日大辞典』によって前者が達成され、学術代表団の訪中が後者の嚆矢であることは論を俟たない。

資料

6-1 学術代表団の訪中

- a 訪中申請
 - b 朝日新聞記事
 - c 愛知大学と中国との新証言
 - d 愛大宛中国日本友好協会からの返信
 - e 訪中申請書 (1)(2)
 - f 人民日報記事
- 6-2 学術代表団の帰国
- a 愛知大学通信
 - b 帰国挨拶状 (1)(2)(3)
 - c NHK テレビ放送用コンテ：愛知の話題「辞典が結ぶ日中友好」

今泉潤太郎 Imaizumi Juntaro 愛知大学名誉教授 専門：中国語学

一九五四年、中国人民保衛世界和平委員会より、「中日文化交流のため日本人へ寄贈」された旧東亜同文書院大学中日大辞典原稿カードは日中友好協会の御斡旋により、愛知大学へ引渡されました。愛知大学はその原稿カードを基礎として中日大辞典を完成し、日中文化交流に寄与し、中国の御好意に報いることを期して鋭意努力致しました。貴国からはその後も参考図書等の資料の寄贈を受け、またたびたび御激励をいただいたことは感謝に堪えません。

中日大辞典は愛知大学における編集開始以来十三年の年月を費やして一応編集を終り、一九六八年二月「中日大辞典」として出版いたしましたことは、当時すでに御報告申上げました。読者の要望にもとずき今年春に版を重ねましたが、辞典の内容につきましては、所期の水準には達して居らず、今後ひきつづき増訂に努め、利用者各位より寄せられた御意見・御批判を汲み入れて、一層充実した辞典にいたしたいと考えて居ります。

一方中国に対しては、初版発行と同時に朝日・毎日両新聞社および友好貿易商社の御援助によって千二百冊を日中備忘録貿易辦事所東京事務所を通じて中国へ寄贈することができました。これは中国の御好意に対して感謝の意を表するとともに、御批判御叱正をいただきましたためでありました。従って中国御訪問はわれわれ中日大辞典関係者年の希望でありました。幸にして、もし、この希望が叶えられるならば、別紙名簿の如き人員を以って訪問団を組織し、明春、中国を訪問し、中国の実情を親しく見聞し、中国各方面より直接御批判御叱正をいただき、それを辞典の増訂に反映させたいと存じて居ります。

以上辞典増訂の方針と訪中の希望を申上げました。何卒格別の御援助を賜わりたくお願い申し上げます。

昭和四十六年九月

愛知大学内

中日大辞典刊行会

鈴木 択郎

日本中国友好協会御中

日中親善へ新風 初の大学交流

愛大が視察団計画

中日大辞典に新語を取り入れ 将来は留学生も

【豊橋】政、財界を中心として進められる日中交流の中で、こんどは文化交流の一役をこなって豊橋市の愛知大学（細迫朝夫学長）の教授陣が訪中する。同大学は二十五日、同大学編さんの中日大辞典刊行会評議員会を開き、同辞典改訂のために學術視察団を中国へ送ることを決めた。国慶節祝賀のため、二十七日に訪中する日中友好協会（正統）訪中代表団の穂積七郎氏（前社会党代議士）が中国側へ計画を伝えるが、訪中の了解が得られれば、大学単位としては戦後初の學術視察団となり、日中文化交流の新しいページを開くものとして期待される。

愛知大学は戦前、中国研究のメッカといわれた上海の東亜同文書院の關係者を中心に二十一年に設立。元東亜同文書院大学長の故本間喜一教授ら中国關係の教授陣十数人、蔵書約十萬冊を持ち、語学、社会科学など各方面の中国研究に大きな成果をあげている。「中日大辞典」はまず、昭和六年ごろ、上海の東亜同文書院で企画が立てられ、終戦直前には資料カード約十四万枚が集められたが、敗戦でカードを国民政府軍に接収された。しかし、終戦当時の東亜同文書院大学長で、のち愛知大学学長になった本間喜一氏はあきらめきれず、二十八年「中日友好のために役立てたい」と郭沫若氏に返還を願った結果、翌年の引揚船「興安丸」で、日中友好協会へ届いた。そこで、同協会はこれを元の關係者の多い愛知大学にゆだね、同大学では三十年四月から鈴木沢郎教授を編集委員長に東亜同文書院大学の元教授や愛知大学關係者が編集に取組み、四十三年二月に完成させた。

B6版、約二千ページ。集録された語いは戦後日本で出版された中日辞典が六万五千語なのに対し、約十三万語。文字改革が取入れられ、文化大革命で生れた新語も取まっております、第一版一萬部は売切れ。ことし四月に第二版六千部を出し、年間千五百部ずつ四年間で売る予定だったが、この八月ですでに一年分が売れ、中国研究者の間で活用されている。

だが、これまでの版では、文化大革命後の中国の変化がまったく取入れられていない。「文革は、中国史上、まれにみる精神的大事件だ。新しい意味をもったコトバを辞書に取入れなくては」「中国の学者の辞書に対する評価も聞きたい」そんな声が關係者から強くあがり、ここ数ヶ月、検討を重ね、この日の評議委員会で訪中計画が正式に決った。

訪中団メンバーは鈴木沢郎教授、今泉潤太郎助教（いずれも中国語専攻）のほか、社会科学関係教授陣も含め、四、五人になる見込み。来年の春休みに約一カ月訪問し、北京の中国科学院語学研究所や北京大学を訪れたいという。

この計画は、細迫学長が郭沫若中日友好協会名誉会長あてに手紙にしたため、二十七日訪中する徳積七郎氏に託される。郭会長は中国側に保管されていた東亜同文書院時代の資料を日本側に返すとき大きな力となっており、このお礼の意味もこめて、「中日大辞典」第二版も一冊細迫学長から贈呈する。

同大学では、訪中の成果をもとに五十年ごろに第三版を出す計画だが、この訪中が実現すれば、政治、経済など社会科学関係の訪中団や、交換留学生も検討する。

中国研究所（東京）の話では、戦後の日中交流のなかで、大学が単独で學術視察団を中国へ送るのは初めてといい、実現すれば、画期的なできごとと評価している。

細迫朝夫愛知大学学長の話 愛知大学は中国とは切っても切れない関係にあり、中国ブームに乗った計画ではない。地道な学問の面で交流し、本格的な日中交流に力を尽くしたい。

徳積七郎氏の話 訪中したら郭氏のほか要人にも積極的に話し、実現に努力する。文革の成果を正しく取入れることは何にもまして重要なことと思う。

〔注〕朝日新聞 昭和四六年（一九七二）九月二十六日（日）所載。

日中国交回復期の愛知大学と中国との「新証言」

我心の師、穂積七郎先生を偲んで

豊橋市 伊藤般展

(前略)

一九七二年の日中国交回復直前、穂積七郎先生は、周恩来総理から密かに日中国交回復の話を受けたと話された。この連絡を田中（角栄）総理に伝え、田中総理の依頼も受け、国交回復の根回しのため訪中され周恩来総理と会談された。出発の3日前に穂積先生からは是非逢いたいとお電話をいただき、来豊された先生をお迎えし、豊橋市内と南設（南設楽郡）を一緒に廻った。夜、東京にお帰りを豊橋駅にお見送りするとき先生は「周総理に何かお願いすることはないかね」と尋ねられた。私は「愛知大学の学術交流の実現に協力して欲しい」とお願いした。

当時愛知大学の学長であった細迫（朝夫）先生に早速報告し、親書を書いていただいた。これを周総理にお届けしていた。たくために2人で羽田空港に穂積先生をお見送りした。先生はお約束通り、これを周総理にお渡しくださり一九七三年六月周総理の母校、天津の南開大学に愛知大学が学術交流団の派遣を実現することができた。愛知大学の訪中団は中国語研修の泰斗鈴木沢郎教授を団長とする4名であった。この経緯については細迫元学長以外御存じない穂積先生の愛知大学日中交流の功績と思う。

(後略)

〔注〕「愛知大学史研究」第一号（二〇〇九年三月 愛知大学東亜同文書院記念ゼンター発行）所載。

細迫朝夫先生：

您给郭沫若先生的信，郭先生已经读过並表示感谢。
鈴木擇郎教授等访华事，已托有关部门研究。
新年之际，敬祝身体健康。

中国日本友好協会
一九七二年一月三日

(訳)

細迫朝夫先生

郭沫若先生宛の貴信、すでに郭先生は目を通され謝意を表されました。鈴木擇郎教授
らの訪中の件、すでに関係部門に研究させております。
新年に際し、ご健康をお祈り致します。

中国日本友好協会
1972年1月3日

〔注〕 公用便箋を用いず、普通の便箋に手書きで 6 行の文。署名や公印も無く
文化大革命中の混乱がうかがわれる。

郭沫若先生：敬启者，曾于去年九月本校前任校长细迫朝夫先生拜托穗积七郎先生呈上一函，表示本校教授铃木择郎先生等数名甚愿访问贵国，参观与语言研究有关之各种学校、机关等，接收种种指导，而将所获一切教益，预备在改订本校所编「中日大辞典」的时候，有所反映到，以便该辞典在中日文化交流上更能进一步地尽责任。我们在该函上曾经表示，还愿意在大学之间也能进行交流，而对于中日友好所贡献。

我方早在今年一月初接到贵方中日友好协会函，已悉前述我方一函，已蒙先生披阅，再托有关部门研究。

不幸，我们校内发生一次长期纷争，以致前任校长细迫先生辞职，本人于五月始继任。因此，诸事处理拖延，甚感抱歉。本人对于上述前任校长计划，表示完全赞同，对于贵方好意，表示深切的感谢。上面所请，如能在明年三、四月之间进行访问，呈所至感。

兹再托穗积先生趋前之幸便，向先生表示感谢，再请先生予以鼎立，是盼！敬祝健康！

爱知大学学长

1972. 7. 18

〔注〕穗积七郎氏は地元選出の社会党前代議員。

中国日本友好协会：敬启者本校拟派铃木择郎等共四名，在今年四、五之间访问贵国，愿向有关中国语言研究方面请求指教，顺路还参观各地，以资理解贵国社会情况。所得教益，预备在将来改订“中日大辞典”时反映到。我们还愿意在大学之间也能够进行交流，而对于中日友好有所贡献。前任校长细迫朝夫先生曾于1971年9月托穗积七郎先生捎带一翰给郭沫若先生请求费神介绍。旋至1972年1月接到贵会给细迫校长的信。信上的话如下：

您给郭沫若先生的信，郭沫若先生已经读过并表示感谢。铃木择郎教授等访华事，已托有关部门研究。（下略）

中国日本友好协会 一九七二年一月三日

但因1971年10月到1972年3月之间，我校有纠纷，关于访华之事，未能积极进行，甚为遗憾。现在通过日本中国文化交流协会的介绍，再次请求考虑，将所请之事，予以准许，是盼！

一九七三年一月十一日

爱知大学长 久曾神升

附：访华团团员名单

铃木择郎 (74岁) 文学部教授 (中国语学)
池上贞一 (55岁) 法经学部教授 (中国政治史)
今泉润太郎 (40岁) 教养部助教授 (中国语学)
中岛敏夫 (41岁) 文学部助教授 (中国文学)

〔注〕中日友好協会宛 訪中要望書。

郭沫若院长会见四位日本学者

宾主进行了友好的谈话

新华社一九七三年六月二十三日讯

中国科学院院长、中日友协名誉会长郭沫若，今天下午会见了《中日大辞典》的编纂者、日本爱知大学铃木择郎、池上贞一、今泉润太郎、中岛敏夫四位学者。

宾主进行了友好的谈话。有关方面负责人和工作人员叶籁士、胡守鑫、李何林、崔泰山等参加了会见。

铃木择郎等一行是应天津南开大学邀请前来我国访问的。他们结束在天津的参观访问后，于六月二十二日到达北京。在京访问结束后，他们将赴西安、上海、广州等地参观，然后回国。

〔注〕人民日报 1973 年 6 月 24 日所载。

愛知大学通信

中国訪問で大きな成果

— 本学、学術訪中団一行帰国報告 —

高く評価された

愛大刊

中日大辞典

本学と中国との「きずな」復活

訪中レポート

本学と中国との絆、再び深まる。約二十日間という短い日程であったが、今回の訪中団の中国での足あととは今後、中日大辞典のための資料交換のほか、広く学術交流への着実な足がかりとなった。

本学の学術訪中団（団長・鈴木択郎教授）は、さる六月十五日出発し、実り多い成果を得て七月五日帰国した。本学中国研究スタッフが出版した中日大辞典は中国でも高く評価され、また全面改訂に必要な資料も豊富に収集。さらに南開、復旦（ふたん）両大学との学術交流や広州―北京―天津―西安―上海など中国の中心城市を訪れて友好を深めた。

北京では、郭沫若中国科学院長と会し「人民日報」紙上でも、「友好深める日本の学者」として、大きく報道されるなど日中友好の貴重なかけ橋の役割を充分果たしたといえよう。

以下、鈴木団長はじめ訪中団一行の中国の印象や大学の実情をつぶさに報告していただいた。

学会の交流を開いた訪中

団長 鈴木択郎

出 発

五月十五日突然、天津南開大学から招待電報を受け取った。南開大学から招待された理由は、当方の訪中の目的が中日大辞典に関する事なので、科教祖から文科系の三大

学、すなわち南開大学、北京の北京大学、上海の復旦大学に依頼し、責任校として一切の世話を南開に委託したというのであると思う。

前に中日大辞典刊行会評議会によって決定されていた左記四名の団員は六月十五日出発をめぐりに直ちに渡航手続を開始した。

団長 鈴木沢郎（文学部教授）

団員 池上貞一（法経学部教授）

同 今泉潤太郎（教養部助教授）

同 中島敏夫（文学部助教授）

訪中団は予定通り六月十五日に羽田をたった。

香港、広州

六月十五日九龍空港着、一泊。十六日午前深圳から入国。深圳には南開大学から派遣された天津国際旅行社所属の通訳符言氏が出迎えてくれた。広州駅に着くと、そこには南開大学から派遣された李何林教授、事務局責任者張宗法氏、広州市教育局革命委員会主任林史氏、師範大学教授李顯仁氏、広州市外事処主任等が出迎えて下さった。李何林教授は張宗法氏からきいたところでは一九二七年八月、南昌蜂起に参加した人だとのこと、魯迅および近代文学研究で有名な人である。

この李教授、張宗法氏、符言氏は、われわれがこの旅行をおわり、この広州から出国するまで、炎暑の季に、二週間にわたりずっとわれわれにつき添って世話をして下さいました。われわれが御苦労をねぎらい感謝のことばを発すると、「わたしはあなたより若い」「中日友好のため、中日文化交流のためだ」といわれ、労をいとわれなかった友誼の厚さと誠実さとは敬意と謝意を表せざるを得ない。

われわれは特別の待遇を受けているのか、建物はあまり大きくはないが、豪華にして閑静な庭園のある迎賓館に泊められた。

午後四時から車三台に分乗して市内見学。夜は教育局主任林史氏の歓迎宴に招待された。

六月十七日、広州博物館、農民運動講習所、革命陳列館見学。

上海経由―北京へ

午後四時三十五分広州発飛行機で上海へ、六時二十一分上海着。空港で夕食をすまし、七時五十分発北京へ。九時五十分北京着、空港には南開大学さしまわしの自動車三台と用務員二人とが待っており、直ちに天津へ行く予定だったが、時間がおそいので北京へ泊ることになった。

北京から天津へ

六月十八日、九時出発、途中天安門前で下車、人民英雄碑を見て天津へ向かった。道路は舗装され、並木は茂っていた。沿道には農民たちが刈りとった小麦を路上にひろげ、その上を自動車を通らせ自然脱穀をしていた。農民がだいにされるお国柄である。農

民の便利のためには交通上の不便など問題ではないらしい。もつとも交通量は極めて少ない。道路はたいらで、両側はひろびろとした河北平野である。見わたす限りの畑、その間に農村が点在している。

午後一時頃天津着。南開大学の人に迎えられて天津飯店（元英租界のアストロホテルだったとのこと）へ入った。四時から李何林教授との日程の打ち合わせ。三日間を天津で消化し、あとは北京、上海を経て廣州へ六月三十日着、全工程飛行機利用とのことであった。当方から西安を加え、上海廣州間を汽車にするよう要望した。

夜は天津市革命委員会副主任（旧副市長に当る）王曼恬女史の招宴あり、李何林氏ほか数氏および外事処副主任等が陪席した。

南開大学の概況

六月十九日、九時、中国製自動車「上海」三台に分乗して南開大学へ。会場にあてられていた中文系の校舎へつくと革命委員会副主任（旧称副校長に当る）呉大任氏はじめ、中文系、歴史系、日文教研組の諸教授多数が建物の前に出て拍手と握手で迎えてくれた。帰るときも同様であった。このような

送迎は朝夕ばかりではなく、昼飯に帰るときも同様で、毎日これがくりかえされた。午後は副主任から南開大学の概況の説明があった。

南開大学は一九一九年に設立された私立私立大学であった。一九四九年に一たん解散され改めて設立されたもので、現在は全国から学生を募集する全国性文理科大学である。学部は九系（学部）、二八專業（専攻）がある。九系は中文、外文、歴史、哲学、政治経済学、数学、化学、物理生物である。敷地は二百万平方メートル。

文化大革命後数年間は他大学同様学生募集を中止し、一九七一年九月に募集を行い、現在は第二次までしかない。現在学生数は一四七〇名、今年九月には九六〇名を募集する。将来は四〇〇〇〜五〇〇〇名に達する予定。入学資格は初級中学卒業（現在高級中学卒業者はない）で二年以上の工、農、兵の労働歴あり、各単位から推せんされたものを大学が復試を行って入学させる。

教学方針は一九五八年八月毛主席がこの大学を視察した際与えた重要指示によっている。そのれは、一、党委員会による指導、二、大衆路線によること、三、教育は生産労働と結合しなければならない、ということである。学生、教授は旧大学制度を批判し、教育方法、教育内容においても創造的な試験が行われ、教育革命は好成績をおさめた。しかし、無産階級による指導権は解決していなかったので、劉少奇らによる修正主義教育路線が系統化され、毛沢東指示による教育革命は一九六六年のプロ文化大革命を待たなければならなかった。

呉副主任の概況説明の後、中文関係の授業參觀、図書館見学をおわり、一たん宿舍に帰り、昼食、休息の後二時半から特種工芸品（蠟石彫刻）工場を見学。

「中日大辞典」検討会

六月二十日、午前は九時から十一時半まで、午後は二時二十分から六時まで中日大辞

典に対する評価や検討があった。

翌二十一日も午前八時五十分から十二時まで同様のことが行われた。中文系、歴史系、日語教研室等の教授七名から発言があった。各教授は「不成熟な意見だから御参考になれば幸である」と前置きをいわれながら、みなよく研究しておられた。中日の立場の差、あるいはわれわれ編者の不勉強、不注意のため、中国人の思想感情に合わない表現なども指摘され、われわれにとつて非常に有益であった。時にはきつい発言もあったが、非常に友好的で、この辞典は中国人にとつても必要な辞典であるから一層改善されようとしていることは望ましいとのことであった。

午後はわれわれ代表团から報告を行った。鈴木団長は「日本の中国研究と愛知大学」、池上教授は通訳を介せず直接中国語で「日本における中国思想史研究」、今泉助教授は「愛知大学及びその他の大学ならびに大学以外における中国語研究状況」、中島助教授は「日本カナと日中友好」という題で報告を行った。聴講者は南開大学中文系の教授、研究員等約四十名であった。予定の時間もだいぶ過ぎ、われわれから忙しい方は自由退去されんことを申出たが、一人も退出した人はなかった。

南開大学への提議

報告終了後、代表团より南開大学に対し、次の四項目の提案をした。
一、愛知大学は南開大学教授の日本訪問を歓迎する。期間は二週間とし、時期は貴方の都合により決定されたい。日本国内における一切の費用は愛知大学が負担する。

二、教授の交流、即ち教授が相手方の国にある期間滞在して研究する場合、相互に援助する。

三、学生の訪問旅行あるいは短期の滞在学習を相互に行い、両大学はそれぞれ適当な援助をする。

四、研究上における交流を深め、研究資料、出版物の交換を行う。中日大辞典に対しては、今後とも御指教を願いたい。

提案を終わって両大学の間に贈物の交換が盛んな拍手裡に行われた。

南開大学からは次の小学関係書籍四種が贈られた。これらは本学図書館にもあるものだが、版本が乾隆乃至同治のもので珍重さるべきものである。1、説文通訓定声。2、方言。3、経伝釈詞。4、經典積文。代表团からはテープレコーダー一台および中日大辞典（新版のもの）二冊を贈った。

針麻酔見学

六月二十二日、八時、天津医院の骨科を見学。接骨は針麻酔をかけ手法で復位し、二枚の板で挟んで固定する。この間患者はすこしも痛みを感じなかったようであった。石膏のギブスは回復をおくらせるので使用しないとのこと。筆者も骨折の治療をうけた経験から、この方法には賛成である。人民日報によればこの日の北京の最高気温は三十八度であった。

大躍進の西安・上海都市

|| 至れり尽くせりの歓迎ぶり ||

本学卒業生と北京で『ニイハオ』

天津から北京へ

十二時南開大学で呉れ副主任はじめ諸教授が出席し、学内厨房の料理で送別会があった。三時自動車で北京へ。六時すぎ十八日に泊った友誼賓館へ入った。

郭沫若氏と会見、北京大学訪問

六月二十三日午前中故宮内の首都文物出土品展覧会を見学。午後三時三十分一同人民大会堂北京市庁で郭沫若氏（人民代表大会常務委員会副委員長、科学院長）に会見。先方列席者は葉頼士、胡守鑫、李何林、崔泰山の諸氏であった。当方からは中日大辞典については当初からたいへんお世話になったお礼をのべ、郭氏からは辞典二千冊（実は千二百冊）の寄贈を受けたお礼を述べられた。文字改革などについてなごやかな応酬があり、四時十五分辞した。

この後北京大学訪問。郵便局から大学へ書物を送るのに意外に暇どり、北京大学へ着いたのは五時をだいぶ過ぎていた。革命委員会副主席や諸教授に迎えられ、先ず中文系の図書館を見学した。同大学の蔵書は二百万冊、日文の図書だけでも三十余万冊あるという。敷地もとの燕京大学をさらに拡張したもので丘あり林あり池あり川ありで、広大なものである。ここでも中日大辞典に関する準備はしててくれたと思うが、時間の関係かその話は出ず、直ちに革委副主任の招宴になった。陪席した人は中文系古漢語専業の老教授周祖謨氏、近世文学教授林庚氏、東方語言系日文専業下立強氏等であった。周教授は漢語音韻研究で有名であり、同教授の諸論文は読んでいたので、「一見旧知の如し」であった。

長城・十三陵・故宮

六月二十四日午前中八達嶺の長城、十三陵の定陵、長陵、故宮博物館内近代絵画館、珍宝館を見学。

愛大同窓生の招宴

夜、北京駐在または出張中の愛知大卒業の諸君から西四の同和居で御馳走になった。料理はうまかったし、室は二階の広い明るい外賓用のもので、階下の中国人用の狭いほの暗い室とはだいぶちがう。外賓優遇は徹底しているが、毎日新聞の高田氏（㊄）などには外賓隔離と感じたのもうなづけける。客側には、われわれ一行の外、本学名古屋校舎図書館におり、今年四月再度北京大学から招聘された岡崎兼吉氏もおられた、主人側は釜井卓三（㊂）三年卒、読売新聞特派員、当日藤山愛一郎氏の招宴があったので職掌柄欠席、鈴木康雄（㊂）五年卒、東工物産、水野忠志（㊂）四年卒、原子展覧会のため出張中、伊藤嘉彦（㊂）四年卒、東工物産、浦川剛（㊂）四年卒、郡是産業、大水利夫（㊂）五年卒、太平洋物産）の諸君であった。

西安

六月二十五日七時三十分飛行機で西安へ。飛行機は「農業は大寨を学べ」で有名な大寨上空と思われるあたりを通過、段々畑がきれいな貝殻を伏せたように見える。太原へ着陸。水の涸れた黄河の上空を横切り、十二時西安着。西安市革命委員会外事処主任、西北大学教授楊春霖氏らの出迎えを受け、貴賓室で西安概況の説明を受く。宿泊所は先年訪中のとき泊ったことのある人民大廈である。

西安には名勝古跡が多い。有史前のものは六千年前の村落遺跡が発見され、それにすっぽり屋根をかけ、半坡博物館として保護されている。有史以後では三千年前の西周以来、秦、漢、唐など二千年にわたり都のあったところである。陝西博物館、秦始皇帝陵、小雁塔、大雁塔、華清池、その他古跡名勝は枚挙にいとまがない。

華清池は郊外三十キロばかりのところ、長恨歌に「春寒賜浴華清池」と歌われているところ、唐玄宗と楊貴妃とのロマンを秘めた温泉で、今も温泉は滾々と湧出している。

また同じところで一九三七年には蒋介石が麾下の將軍に監禁され、それによって国共合作、抗日統一路線ができた重大な意義のあった西安事変はこの華清池でおこったものである。

西安は解放後、紡績を主とする軽工業の重要な土地となり、解放前の消費都市は一躍して重要な生産都市となった。一九五八年に来たときは人口一四〇万人といわれていたが、現在は二五〇万の人口を擁する大都会となった。

上海

六月二十七日九時五分西安を飛び立ち、途中鄭州、南京を経て二時五十分上海着。飛行機は西安から大体黄河の南、秦嶺山脈を眼下に見て東に飛ぶ。平野が開けんとし鄭州に着く。鄭州を飛び立てば景観は陝西・山西とは全く異なり眼下は一面の河南、江蘇の大平原、大小の湖と河川である。機は東南へ、間もなく黄龍にも似た長江を横切り南京へ着陸。南京を飛びたてば水郷の上を飛ぶこと一時間にして上海虹橋飛行場に着く。外事処の人や復旦大学の劉大杰教授らに迎えられた。空港の待合室に休憩していると日航機が発することを呼び掛けて通る日本人があった。これは遺骨送還の帰りで、本学の前同窓会長伊藤治雄君も乗っていたとのことであった。

外事処差廻しの例の「上海」三台に分乗して、虹橋路を東へ走った。筆者が終戦時まで二十八年間住んだところはこの道路に沿っているのだが、その辺はすでに市街化しており、その位置を確かめることもできなかった。三時三十分衡山賓館着。このホテルは戦時中からあり、この辺でいちばん高い十四階のマンションであった。十四階からは龍華の塔も黄浦江も南市越しに見えた。

夕刻一時間あまりの時間を利用して南京路へ出て、新華書店、上海第一百貨商店（元の大新公司百貨店）で買物をした。書店の書物も百貨店の商品も少なく、街の外観は古ぼけたままであり、バスのほか自動車はほとんど通らないので、大通りはところどころらわ

ず横断する人々でまさしく歩行者天国である。
夜は上海市革命委員会副主任劉芳女史の招宴があつた。女史は教育担当の副市长級の
人である。

魯迅墓・蕃瓜弄・五七幹部学校

六月二十八日、上海工業展、虹口公園内魯迅墓および魯迅故居等を見学。午後は蕃瓜
弄とその託児所訪問。解放前の非人間的な生活と現在の生活とが対比できるようなし
てあり、いわゆる「憶苦思甜」の見本である。南開大学の幼稚園でもそうであつたが、こ
こでもこどもたちは声をそろえて「叔叔好！」と連呼していたが、筆者を見ると「爺爺
好！」とことばをかえて歓迎してくれた。

夜七時から九時まで五七幹部学校の幹部および學員ら四名からその学校の状況を説
明してもらつた。上級幹部のきびしい修練の大体がわかつた。この学校の參觀希望を申
し出ていたのだが、学校まで七十キロもあるので先方から来てくれたのであつた。

復旦大学訪問

六月二十九日、復旦大学訪問。先ず革命委員会副主任から概況説明を受けた。

本校は解放前は国民党の重点大学であつたが規模は小さかつた。開放後規模は拡大さ
れ、

敷地面積は三倍、建物は四倍、図書は二十倍で一六〇万冊になつた。学部は文科理科の
十三系、外に五研究所、二工場を持つてゐる。学生二九〇名、教授一五一名、講師二
九二名、助教一三三一名、助教はすでに教授の力を備えており、これが主要なる教授の
後継者である。この外、半年、一年半、二年の鍛錬班、訓練班がある。

理論と実際の結合のため自ら二工場を経営しており、文科学生は農村や工場へ行つて
労働し、階級闘争に参加し、自己の思想を改造する。また社会調査をして放送や新聞で
発表し、散文、詩、小説などを人民出版社から出版した。

この大学は日本語教育には成果をあげてゐる。日本語教室を參觀、朗読と通訳をや
つて見せてくれた。たいへんりっぱなでき映えだつた。一年次生であつたが、昨年九月
入学したのだから、まる十か月学習した学生であつた。上海放送局の日本語講座テキス
トはこの大学の日語教研室編纂のものである。時間はわずか一時間だったが、こゝでも
中日大辞典に対し貴重な批評を受けた。午後、虹橋人民公社見学。

上海から広州へ

六月三十日、上海駅へ着き貴賓室に時間待ちしているところへ、賓館から誰かが忘れ
た上着をとどけてくれた。忘れ物は迷惑をかけるので日頃いましめ合つていたところだ
つた。忘れた上着は今泉君のものであつた。池上君はすかさず中国語で「この人はわれわ
れの秘書長なんですよ」とやつたので一同どつと笑つたという喜劇が一幕あり、八時四
十八分汽車で上海発。働いている人、駅の風景、川の流れ、土のにおい、点と点をつな
ぎ、その両側に広がる面を見、中国をじかに感ずることができた。飛行機で二時間の
ところを三十二時間もかけたことに悔いはなかつた。しかし、亜熱帯の夏の三十二時間

は、同行して下さった李教授ら三人にはたいへん迷惑だったことで申し訳ないことであった。七月一日十七時三十五分広州着。往きと同じく教育局長林史氏、師範大学教授李顕仁氏、外事処主任等の人々に迎えられ東方賓館へ入った。夜はまたも林局長の送別の宴があり、この二週間に経験を積んだ「中日友好のために乾杯」の交歓があり、なごやかな一夕を過ぎた。

香港へ

七月二日、昨日出迎えて下さった人々、二週間同行して世話をして下さいました南開大学の李教授、張宗法氏らに送られて広州をたつた。深圳で二週間の御苦勞を謝して符言氏と別れ香港へ向かった。九龍の美麗華酒店 (Miramar Hotel) へ入った。

七月三日、車で香港島一巡。

七月四日、九時報告会の打合わせをし、午後は買物や市内見物に費した。夜は同文書院同窓会香港支部の諸君から招待を受けた。客側はわれわれ一行四名、今春早大を出て三菱の語学研究生として来ている若者、主人側出席者は中国人三名、日本人六名であった。愛大卒業生も数人居ると思うが連絡がとれなかった。

帰校、記者会見、報告会

七月五日、BOAC 機で香港発、機中で一時間あまり李何林教授からきたい南開大学中文系教学情况についての座談会を持った。昼頃羽田着。大学からは庶務課の胡麻本君を派して世話して下さいました。四時豊橋着。五時から第一会議室で記者会見をして報告した。

七月六日、午後一時、三十二番教室で学生、教職員に報告し、報告会終了後グラウンドホテルで歓迎慰勞会があった。これでわれわれの訪中旅行は「勝利結束」した。

『中国の大学』訪問記

池上貞一教授

われわれ訪中団が中国に滞在した期間は十七日間であり、この間、天津の南開大学、北京の北京大学、上海の復旦大学の三大学を訪問した。特に南開大学は四日にわたって訪問したので、同大学での見聞を中心に、中国の大学について、盲人が象をなでる思いで若干述べてみたい。

中国の学校

天津ではホテルと南開大学の間を自動車で往復する途中によく登下校する中学生を見かけたが、かれらの服装は画一的な制服ではなかった。小学生も大学生もしかりであった。またすべての学校は昼に二時間程度の休憩時間があり、小中学生たちは自宅に帰

つて昼食をとるのである。建国後、学校数が大幅に増加したことは言うまでもないが、大都市の新設小中学校のなかには既存の他の建物を利用したものもかなりあるようであったがすべてが標準的な大きさの敷地と建物を備えているわけではない。上海でも世話役の話では、一部に二部授業をやっている学校もあるとのことであった。また天津の公園で話し合った中学生は、授業料は一学期四元（二学期制、一元は日本円の百四十円）で教科書は購入する、外国語は英語を週四回（週三回の中学もある）やっており、天津第二〇中学では日本語とロシア語をやっている、八月には学校から集団労働に行くと言っていた。なお文化大革命後の教学改革によって、中国の教学過程は小学五年、中学五年（初級中学三年、高級中学二年）、大学三年に短縮された。

広大な南開大学

さて、話を大学に戻すと、南開大学の校地の広さは東西二キロ、南北一キロと言っていたから約六十万坪である。教員と職員の大部分は学内に住んでおり、学内には教職員の子弟のための幼稚園（託児所を含む）、小学校、中学校が付設されており、付属工場と農場も設置されている。学生は全員寄宿制であり、学費、生活費はすべて無料であるとのことであった。学内にはペンキの赤い地に白字でスローガンの書かれた立看板があちこちに建っていたが、文革時の「大字報」はすっかり姿を消していた。学内には解放軍の制服や帽子を被った男女が目についたが、それらは解放軍から選抜されて入学している学生たちであった。

南開大学の本部の建物には、「中国共産党南開大学委員会」と「南開大学革命委員会」という二枚の看板が掛かっている。すなわち革命委員会が大学の管理機関であり、党委員会は革命委員会を「領導」するのである。大学は幾つかの系（学科）から構成されており、系はまた幾つかの教研室から構成されている。そして全体の管理機構としては①党委員会領導下の革命委員会↓党総支部領導下の系主任責任制↓党支部領導下の教研室主任責任制の三級制をとっているとのことである。

南開大学の教室棟の廊下の壁に「工宣隊弁公室」の名札がかかっていたが、一九六八年に各大学に進駐してきた工宣隊（労働者毛沢東思想宣伝隊）はまだいるのかと聞いたところ、まだ少しいて党委員会を補佐している、解放軍宣伝隊は撤退したとのことであった。そういえば南開大学革委会主任は軍人タイプであったし、復旦大学で説明に当たった革委会副主任は工宣隊出身であるとの説明をうけた。なお復旦大学でも文革時にはセクト間の激しい対立はあったが武闘はなかった。最も激しい武闘が行われたのは北京の清華大学である。復旦に入ってきた工宣隊は約千名であったとのことである。

中国の大学は、一般には〇〇大学とよばれる総合大学と〇〇学院とよばれる単科大学からなっている。われわれの訪問した三大学とも全国性（ほかに地方性がある）の総合大学であるが、南開大学は中文、歴史、外文、哲学、政治経済学、数学、生物、物理、化学の九系、二十八専攻から構成されている。

現在の北京大学

これに対し北京大学は、文科系としては哲学、中文、外文、歴史、法律、政治、経済、図書館の八系、理科系としては数学、物理、化学、生物、地球物理、地質地理、無線電信の七系から構成されていた。なお各系に共通した必修科目としては政治経済学、哲学、中共党史があり、また休暇は文革以前は夏と冬で二ヵ月あったが、現在では夏休みと冬休みで一ヵ月である。中国のすべての大学が、文革の過程で一九六六年から七〇年までの約四年間学生募集を停止していたことは周知の事実であるが、南開大学では七一年に正式募集を始め、六月中旬現在で一学年と二学年があり、現在の学生数は千七百数十名で、今年（中国では普通は九月が新学期）は九百六十余名募集する、将来の学生数は四、五千名に達するであろうと言っていた。北京大学では現在は、二学年は欠けており、一学年と三学年しかおらず、学生数は四千余人である。ただし法律系と心理学専攻はまだ募集していない。法律系ではただ公安、司法関係公務員の短期訓練班の教育を行っているだけであると言っていた。復旦では七〇年十一月に初めて学生を募集し、七二年四月に第二期を募集し、現在正規の学生数は千七百余名であると言っていた。また西安の西北大学では六月現在一学年しかおらず、上海の交通大学ではまだ学生募集が行われておらず、今年には募集するそうである。

各大学の教学方針

中国の各大学の教学方針は、南開大学の説明では、文革直前まではソ連を模範にしたのであり、それは欧米となら異なるところがなく、修正主義的であり、資本主義を復活させる危険性のある方針であった。そこで文化大革命は、その任務の一つとして教学改革をめざしたのであるが、南開大学の説明では改革は毛主席の指示にもとづいて進められた。指示の重点は、①教育は必ず無産階級の政治に奉仕しなければならず、生産労働と結合しなければならない ②修業年限は短縮しなければならない ③学生は文化を学ぶだけでなく、工業を学び、農業を学び、軍事を学ばなければならない、またブルジョア階級の批判も行わなければならない、である。

以上の指導方針にもとづいて、まず入学者の選抜方法が変革された。学生は労働者、農民、解放軍のなから募集される。本人が志願し、所属単位の大衆から推薦され、上級機関（人民公社から推薦される場合には県の党委員会）の承認を得たものの中から各大学が選抜する。条件になるのは、①本人の政治的態度 ②一年以上工場、公社、解放軍に勤務したもの ③初級中学卒業程度の文化水準を有することである。復旦大学の日語専攻の女子学生は初級中学を出て二年工場で働いたと言っていた。

次に教学については、従来のように学校でのみ教学が行われるのではなく、「開門弁学」（学校の扉を社会に開いて教学を行う）の方針が取り入れられている。それは第一に教師、学生が工場、農村に向き生産労働にたずさわることにより、肉体労働を軽べつし、労働者、農民を軽べつする風習を消滅させ、労働者、農民との間を感情的に融合させることができる。

第二に、書物から学ぶだけでなく、理科系は実際に工場や農村で生産に従事することによって実践から学ぶことができるし、労働者、農民から学ぶことができる。文科系も社会調査や社会に出て関連のある仕事に従事することを通じて生きた教育を受け、また労働者、農民から教えることができる。第三に社会における階級闘争に参加することによって、階級的観点を強化することができる、ということがねらいである。

また学内における教学においても、従来のように教師が講義をし、学生が聞くだけではなく、学生が自分で思考し自分で問題を分析し解決する能力の養成が目ざされており、教師は観点や方法上の指示を与えるのだと説明された。試験の方法についても、つめこみ式やまる暗記式の試験方法に反対し、問題を分析し解決する能力を測定することに重点を置くと言っていた。そして最後に、教学改革はまだ試験的段階にあることを強調していた。

中国の大学は、まさにわが道を行く中国社会主義とその現状の反映であるということができるであろう。またその教学改革から何を汲みとるべきかを、私もじっくり考えて見たい。

中日大辞典に関する南開・復旦両大学での座談会

今泉潤太郎助教授

得難い体験

二週間余にわたる中国での経験は充実したものであった。訪中の主な目的である中日大辞典についての座談会、それは天津南開大学で一日半、上海復旦大学で半日足らずであったが、私にとってここでの時間は得難く貴重なものであった。いま、当時の座談会録音したテープを聞き整理しながら、発言者の表情をあざやかに思い出す。ときに激した口調で話されたW教授、講義の際と変らぬ態度で諄々と述べられた温和なX教授、闊達な人柄そのままあけっぴろげでよく笑われるL教授など、その声とともに現れてくる。緊張が心地よく覚えるひとときであった。

座談会のこと

両大学でも座談会は、ここの文学、語学、歴史関係の二十名余りの先生方が出席されて行われた。先方には数冊の中日大辞典が備えてあった。かなりの時間にわたり、大勢でこの座談会のために準備されたらしく思われたが、その発言を聞くに及んでそれが確められた。それは各人の発言が重複していないこと、辞典本文全般におよんで指摘されていること、思想、文学、歴史、言語の各面から発言されていることなどからも窺えた。銘々が手帳に書きこんだメモを見ながら意見述べる際、「これは個人の意見であり、成熟していない初步的な意見にすぎない。御参考に供するだけである」と、どの発言者

も様に述べられる。発言内容は時に厳しいものもあったが、まことに謙虚態度であった。南開大学での座談会終了の際、司会役の李何林教授の挨拶に、「自分達の意見は成熟していないばかりでなく、誤りが有るかもしれない。御教示を賜りたい。また両国の社会環境も異なり、日本には日本なりの制約があるだろう。これらの意見は御参考にまで述べたものである。共同してよりよい辞典を作りあげたいという考えから忌憚のない意見を出した。これも中日友好のための友誼の発露と考えている。

不適當な個所については御諒承を願いたい」とあったが、これは復旦大学の方々も全く同じような態度であった。

辞典の評価

予期以上の好意的な評価を受けているように思う。優点としてあげられたのは、

一、語彙が豊富である。現代漢語をはじめ、方言、旧時の語まで広く集めている。
二、語彙の選択及び語義、解釈等において、中日両国人民の友好関係を物語っている。事物の真実を反映している。

三、普通話（口語）を重視している。

四、審音表に基づき、漢語拼音方案に依って注音している。

五、簡化字を用い、繁体、異体を並記している。

六、付録が多彩で、特に日中字形対照表は便利である等であった。そしてこの辞典は中国語を学ぶ日本人の工具書たるのみならず、中国人が日本語を学ぶのにも役立つものである。中日文化交流、人民往来を促進する役割を果たしていると評価された。

後日、北京で郭沫若先生にお目にかかった際にも、さきに中国へ寄贈した一千二百冊の中日大辞典は、各方面で活用されているとお話を伺うことができた。また、上海で、たまたまバスに乗り合わせた女性が一冊の中日大辞典を所持しているのを見かけて問い合わせたところ、上海市教育局に勤務しているとの返事であった。思いもしない場所、中日大辞典を見かけて、些かなりとも役立つっていると偶然ながら確認できた。

中国側の意見

座談会で述べられた中国側の意見を一、二の実例をあげてまとめて紹介する。

一、中国人民の思想、感情に合致していること。事物の真実を反映していること。特に歴史事件に対する説明は一步進めてその本質を暴露することなどが必要である。例えば、「中国」の説明中、中華人民共和国の略。また「為」の解釈の例文中「為人民服務」。また「毛沢東思想」の説明などはその好例である。また「頼租」の解釈即ち、地代、年貢などを納めないこととあるがこれは正確ではない。まず現在はこのような事柄自体が存在しない。従って語もない。解放前の語である旨の注が必要である。旧時、地主が農民を軽蔑して言った語であり、これは農民が地主に反抗する手段である「抗租」に他ならない。また「長髮賊」「教匪」「拳匪」などの語は封建地主階級の農民階級に対する蔑称であり、現在の中国人民の思想、感情に合わない。また「七七事変」説明中、盧溝橋で勃発した日本軍と中国軍の衝突事件云々とあるが、これは日本軍国主義分子が

中国軍に對し發動した侵略戦争である。歴史事件に對しては本質を明確にする必要がある。

二、あいまいな、正確でない語や説明を訂正すること。「脱褲子」「脱褲子割尾巴」として用いる。元來「割尾巴」に重点がある。プチブル思想を刈りとる、古い思想を剔抉する意味であり、説明中のパンツを脱ぎ云々は事実には合わない。また「最可愛の人」は抗米援朝の時、中国人民志願軍に對する親しみの称であり、中国人民解放軍に對してのそれは「親人」と言う。また「光荣之家」は戦死者を出した家に限らない。中国人民解放軍に参軍した者の家族及び革命烈士の家族である。また「三八作風」は現在あまり言わない。「三句話八个字」として用いる。また「三大規律」は「三大紀律」が正しい。また「民警」は「人民警察」の略である。人民に服務する警察の意であり、「公安局」のことである。

三、文化大革命以後の状況を反映すること。「紅五類」、「黒五類」、「自来紅」などは一部の誤った考えから出たもので削除したかどうか。「五類分子」も同様であるが、「四類分子」はある。また「劉少奇」は、かつて国家主席の職を盗みとり、一九六八年あらゆる職務を解かれ永久に党から除名された。

四、規範化された語とそうでないものを明確にすること。「氣候站」は「氣象站」、「無投信」は「無着郵件」が規範化された語である。外国の地名の音訳においても同様である。「維爾賽」は「凡爾賽」が正しい。また「播音小姐」、「紅帽」、「売地契」などは旧時の語であり現在はない。このような語は載せないか、載せるならば誤解を与えないよう旧時と注しておき、現在は使わぬことをはっきりさせておく。このような取扱いをすべき語は多い。

五、説明、解釈の日本語は中国人にとつてまたとない日本語学習上の教材の役割を果たしている。「我来試試看」を「どうれ、私が試してみよう」と訳しているような、生き生きとした、適切な日本語が与えられている例は非常に多いが、なお一層辞典の隅々まで気を配って欲しい。「虚心」を「すなおに」、「工作」を「はたらく」、「学習」を「まなぶ」といったような本来の日本語も当てる欲しい。「工作する」、「学習する」といった表現形式ではないのを必要としている。「既往不咎」を「水に流す」、「挑撥離間」を「水を差す」としたい。

六、方言、発音について。これらは非常に複雑で判断は容易でないがと前置きし、八方言区に分けたらどうか。「打瞌睡」が滬方言とあるのは吳方言、また「打整」、「打皺」は北方方言である。俗語を区別して標示しているが、これは上品な語に對して卑俗な語の謂いであるが、現在では普通話と方言の別があるだけである。「成績」、「幹部」などは完全に轻声である。

以上六点にまとめて紹介した。指摘は二百個所に及んだ。現在これらを整理し他日の検討に供するべく仕事を始めかけている。ただ甚だ残念であったのは、中国滞在日数が少なく、日程の関係で、北京大学、復旦大学での座談会には十分な時間をとることがで

きなかったことである。そのため、発言を予定されていた人々の全員が意見を述べるといふわけにいかず、また発言された人でもかなり内容を割愛して話されたようであった。返す返すも心残りである。しかし今後継続的な大学間の交流が軌道に乗れば、今回の座談会で指摘されたものの外、更により多くの教示を得ることができ、より一層充実した辞典にしていくことができよう。将来これが実現する日の一日も早からんことを願うとともに現在においても出来るだけのことをしなければと思うものである。

中国の印象

中島敏夫助教

北京上空

飛行機の外はもうすっかり暗くなっていたが、西と思われる右後方の地平線のあたりの空だけに、まだわずかな明りが残っていた。私は中国民航のジェット機の右窓側に坐り、窓に顔をくっつけて外を見つづけていた。広州から上海へ飛び、上海空港で夕食をとり、上海発、夜七時四十五分、北京へ向かった。もう一時間半近く飛んだ。遠い空で音もなく雷が光る。下を見おろすと、暗い光が低くなってきているのが判る。じつと目を凝らしていると、ちようど、蛍の淡い光のように暗い光が、微かに点在している。人家の灯だろう。もう北京へ着く頃だ。この機は時速八五〇キロということだったが、やがて蛍の光は数を増した。あたかも、散りばめた寶石が、暗闇の中で青く静かに光る王冠のように思われてくる。高度が下がるやがて一列に並ぶ光がはつきり目に入る。道か。そしてあの王冠のような光が、北京なのか。私の頭の中に、かつて札幌から羽田へ、夜、着いたときのこと浮かんだ。あの時は、確かに声を呑むような驚きだった。窓から見おろした視界全体が、見渡すかぎりの灯の海だった。旋回するにつれ、その灯の海は斜めに傾いて、どこまでも続いた。あの東京の夜景にくらべると、何と控え目な輝きだろうか。下はもう市街というよりは広い田園という感じだったが、すでに北京も郊外なのか。われわれの飛んだ下に毛沢東主席が実際にいたのか、彼は何をしているのだろうなど、とりとめもないことを考えていると、北京へ来たということが実感となって感じられてきた。やがて飛行機は着陸態勢に入った。

夜の天安門

空港からは三台の車、中国製「上海」で市内に向かった。空港を出た所は、もうすっかりテレビでお馴染みの並木道。その一直線の道を時速六、七十キロで走った。街路灯のつかぬ真暗な道で、車は前照灯を消して、小さな車巾灯だけで走った。時たますれちがう対向車も同じようにヘッドライトを消して近づいた。交叉する道路との四つ辻には、真中に赤い電灯がぶらさがっていた。その真暗な路を、時々、灯もつけず自転車走ら

せる人があった。夜の仕事を終えた人、あるいは今から仕事に向かう人のようだった。工場は大体三交代でフルに動いているとのことであり、市内に入ると「通宵商店」、終夜営業の店が開いていた。私の横には張宗法さんが坐っていた。彼は二十七、八歳、労働者出身といった感じで、広州まで李何林教授とともに、出迎えてくれた南開大学の事務主任。助手席に大学の工作員の歌書豪さん、それに運転手の汪さん。皆で充分中国語の理解できぬ私に対して、丁寧に一先懸命、判らせようと努力してくれる。道中二百メートルもあろうかと思われる広い通りを通っている時、張さんが右側を指さして教えてくれた。天安門だった。北京到着の直後に天安門を見ようとは思ってはいなかっただけに、その赤い城門が暗いかな照明の中に浮かぶ光景は、私にとっては夢を見るような風情であった。

北京―西安―上海

われわれの旅は、北京―天津間の往復には車を使った。一六〇キロ、二時間余りの行程である。そのほかは、飛行機と汽車だった。最後の上海―広州間は、最初、飛行機の予約までとってあったのを無理に汽車に変更してもらった。浙江・江西・湖南・広東省を横断する三十三時間の大旅行だった。だがここでは北京―西安、西安―上海の空の旅、その空からの景を思い出すまま書いてみたい。それは広大な中国の北と南とを、実に対照的にわれわれに見せてくれた。西安行の飛行機は、ありがたいことにジェット機ではなくターボ・プロップ機だったので、一万メートルもの高空は飛ばなかった。下が手にとるように見えた。河北省の大平野から、山西省に入ると、山また山の連続である。空から見たその景は、あの模型の地形図と全く同じだった。白褐色の山が、等高線も層をなして積み上げられている。山の頂きまで、あるいは高台状の上まで、何層にも積み上げられている。緑はほとんどないが畑のようだった。文字通り耕して天に至っているのである。だがこの土の色は、果して水を少しでも含んでいるのか。模型の地形図には、ところどころ深い切れ込みが入っていた。谿谷である。しかしよく見ると、その谿谷は、ある長さが続くと途切れてしまう。出口、入口がない。そして水の色は認められなかった。

私たちの飛行機は一直線に太行山脈を横断していた。後で地図を見て気づいたのだが、私たちが飛んだやや南の方に、大塞があった。中国全土で、「農業は大塞に学べ」といつている、あの大塞である。これまた文字通り「愚公山を移す」の精神で、ほとんど人力だけで山に穴を掘り抜いて水を引いてきた、その苦勞とその必要性、それを私はまの当りに見たと思った。今年は、中国の南方では水が多過ぎ、北方では早ばつだという。そう言えば広州に近い北江では、汽車の中から見ていて、川だと思っていたら、その水の中に電柱が並んでいた。張さんの話では、北では『早涝保収』、早ばつを、井戸を掘ることによって乗りきり、ほぼ平年作を保った、という。中国農業の鍵は水である。その並み並みならぬ自然条件との困難なたたかい、今、中国は全土をあげてそれと取組み、一歩一歩着実に前進していると見受けられた。

水が鍵だということは、南では逆の意味でそういえる。西安から鄭州・南京を経て上海へ向かった、空からの景は対照的にその姿を示してくれた。十二時、鄭州を飛びたつと、真下に見える川の水は、鉱石を洗い流したあとのように濁っていた。その赤茶けた色の川に、緑白色の川が合流する。色が変わり、川巾が広がる。山地を抜け出すと地表は、灰褐色に水を湛えた水田と緑の水田とのつぎはぎ模様である。その間を川が蛇行する。それはちょうど、大地をのたうちまわる大蛇のようだった。上空から見はるかす地平線の彼方まで、幾筋もの川が、低きを求めてのたうちまわりながら、東南の揚子江をめぐす。淮河水系の川の群れである。飛行機の高度が下がる。手にとるようになる。陸地が水の中に浮かぶ、といった感じである。ありあまる乳褐色の水。この水の氾濫、わずかの水位の高まりが、すべてを浸してしまおうのではないだろうかと思われる。一旦、増水した水は、どこへ排出すればよいのか。揚子江の勾配が、河口までの四百キロで十万分の一、落差がたった四メートルという驚異的な実体を、私は目の前に見た。水の筋が、水田の間を縦横に走る。それはちょうど道と同じように、一軒一軒の家へ通じる。家を囲む木々の茂みは島である。まさしく「南船北馬」という所以だ。水筋は集まって一つの川となり、川は集まって更に大きな川となる。その上を各種の舟がゆく。その川筋は更に大きな川になる。そして遂に来た。揚子江であった。今までの川筋とは全く桁ちがいの中。満満たる濁水。それはまさしく川の王者であった。スチュワードスが [ohang jiang da tiao] とくり返し教えてくれた。揚子江に橋がかかっているのだ。長江大橋だ。皆が席を立てて左側の窓をのぞいた。長江大橋を、それも空から見ようとは思ってもしなかっただけに、私は興奮した、機はかなり低い。みるみる遠ざかる。そして右へ旋回するにつれ、視界から消えた。いよいよ南京であった。

天津市街の散策

地上のことも一つぐらい書いておかねばなるまい。天津滞在最後の夕方のことだ。日程がぎつしりつまっていて、われわれにはほとんど自由行動をする余裕はなかったが、このままでは何としても心残りだということで、夕食後、池上・今泉両先生と私の三人は外へ出た。鈴木先生はお客さんがあるということで、池上先生は三十数年前の記憶をたよりに、そしてまたその面影を求めて、どんどん先に歩いていかれる。誰かれかまわずに言葉をかける。道をさき、建物についてたずねる。とにかく、何でも話しかけないではおれないようであった。新華書店で本を買ひ、その包みをかかえ、方角もわからないままどんどんと、嫌になるほど歩いた。天津では夕方八時過ぎまで明るいのだが、そろそろ暗くなってきた頃、中心公園という市の中心の公園に入った。園内は日暮れどきの散策を楽しむ人でいっぱい。やつと空いた腰掛を見つけて腰をおろすことができた。私たちの前には一人の青年が、薄暗い夕やみの中で勉強していた。私たちは話しかけた。

青年に道を聞いて繁華街へ出た。混雑する人々。街には並ぶ商店の明かりだけで照明はなく、すっかり暗いが、何と人の多いことか。百貨店の前では、西瓜の種を袋からと

り出して売る男、水中に浮かべるプラスチックの金魚、花を売る男、声をかけながらの立ち売りを人々がとり囲む。映画館から次々と人が出てくる。私たちは食料店に入った。品は実に豊富だった。物珍しく、手にと取っては見てまわった。池上先生は食べたいかどうかとは関係なく買ってみないではおれないらしかった。杏子の乾したの、マントウ、買っては私にくれる。今泉先生も天津栗羊羹を買った。

アイスクャンデー売りは大変な人気だ。街角の煙草屋のような店で売っている。私は買うことにした。表示を見ると、氷〇（木十蒸）（ヒンガオ）両毛、氷棍児（ヒングル）五份とあった。一元が約百四十円、一元が十毛、一毛が十份である。棒のついたのしか残っていないのだが、どちらかよくわからない。一応大きな紙幣で釣りをもらったことにした。列はできていない。てんで、われ先に、手をのばして大混雑である。おとなしく順番を待とうとしても到底無駄だと知れると、ラッシュの電車に乗りこむ要領で強引にもぐりこんでいった。三本を手に入れ、お釣りを勘定してみると、棒はついているが氷〇（木十蒸）らしかった。三人は歩きながら食べた。歩きつづけてきたせいもあり、ことのほかうまかった。

百貨店で買物をしたわれわれは十時閉店ということで裏口から、ぞろぞろ人混みの流れにまじって外へ出た。ただのように安い拓本（四毛）を見て買った、その収穫で、池上先生と私は興奮ぎみだった。「全部買ってほしい」といながらも、そこは遠慮して五、六冊にとどめた。外の暗い街路を、笑いさざめき往來するたぐさんの人。池上先生は「まるでバリ解放じゃないか」と言う。私は彼らの表情に、あわてさせまらず、悠々と生活を楽しむ心のゆとりを読みとりながら、是非もう一度、やって来たいと思わずにはおれなかった。

心打たれた歓迎ぶり

総じて、今回の訪中に際して中国側の見せてくれた歓迎ぶりは並み並みならぬものだった。各地の人々が、できうるかぎり精いっぱい歓迎で迎えてくれた。七十歳の李何林教授、張さん、通訳の符さんは、始から終りまで、つききりで面倒を見てくれた。その誠意ある態度には、われわれ四人、一様に心打たれた。南開大学工作員の耿さん、郭さんのことも忘れられない。それに短い時間の接触にもかかわらず、いっぺんに親しくなった人々。南開大学の高維国さんは二十代の青年かと思われる中文系の先生。きれいな北京語で人なつこく話しかけてくれた。私たち二人は短い時間に何もかも話してしまおうとばかりに話しかけた。私の貧弱な中国語がうらめしかった。彼の奥さんは小学校で作文を教え、上の女の子は八歳、下の男の子が一歳八ヶ月という。上海の宋さんは給料のことを一生懸命話し合った。

忘れられぬ人々

さらに名前も知らぬ、街で出会っただけの人の顔も思い出す。天津の街角で話した二人の小学生兄弟。私にシェンフーから来たのかと聞く。そのシェンフーが判らないでいたら神戸だった。飛行機の中で張さんと親しそうに話していたスチュワデスあまり可愛

かったので、あとで張さんに、知り合いかときくと、いやちがう、という。でも親しうだったね、という、同じ上海出身だったのだ、といった。それは可愛い娘さんだった。南開大学のカメラマンの方が、ふと示してくれたやさしい心づかいは、思い出しても心が熱くなる。大学の図書館の漢籍の書庫を一生懸命、案内してくれた背の高い老人。その強い眼鏡をかけた顔が忘れられない。印象ふかいことが次々と思いつかれる。しかし、あの高先生が座談会の席上「万人抗」について指摘したとき受けた印象は特別強烈だった。私はやさしい高さんの顔を見ながら、われわれ日本人は、かつて、これら人々に対して、本当に戦争をしかけ、侵し、殺しを重ねたのか、と自らに問いかけてみないではおれなかった。疑いようのない答えに對し私はくらくらと目まいを感じる思いであった。池上先生の話によると、盧溝橋事変のとき、天津の中学在学中の池上先生の目の前で、日本の飛行機が南開大学を爆撃したという。爆弾の煙が消えた後、今迄見っていた図書館のドームの姿が消えていたという。池上先生からこの話を聞いていなければ、中国側の態度からは到底、想像もつかないことであった。

日本に帰ってきて、中国滞在中のさまざまな印象を心に思い浮かべるとき、あらためて中国側の好意と誠意に心から感謝しないではおれない。とともに、日本と中国との、人と人との具体的な親しい交わり、その必要と願いとを今更の如く感ずるのである。

以上で訪中団一行の報告を終る。写真特集を含め、これまでになく、身近な中国を感じ、中国への理解を一層深めていただけであろう。

鈴木団長の報告にもあるように、本学から中国側に教授や学生の招待や交流を具体的に明記した四項目にわたる提案を行った。今回の訪中は、本学の建学以来の大きな特色としてあげられる中国研究を大きく発展させ、さらに、本学と中国とのきずなをふたたび深める重要なきかけをつくったことは確かである。

(注) 中日大辞典Ⅱ昭和二十九年、とくに日中友好協会を通じ、中国保衛世界平和委員会から日本人民に寄贈された中日辞典カード十四万枚(旧東亜同文書院大学華語研究会で昭和八年以来作成されたもの)を基礎に、その後の中国の新しい情勢や言葉を加え、本学中国研究陣の十三年にわたる困難な編集作業を経て、昭和四十三年二月に刊行されたもの。四五年春、さらに改定を加え、他に類をみない中国研究の貴重な辞典として高い評価を受けている。

6-2 b(1)

先生：

我们此次欣得访问贵国，路过贵地，多承亲切款待指教，感谢不尽。我们访问的日子虽然不多，所学习过的，所请教过的，耳听目睹的事情，没有一个不是对我们的教育，甚觉欣幸！我们已于七月五号安然回校，请勿悬念！特此报告，并且表示深切感谢！敬祝

健康！

一九七三年八月 日

日本爱知县丰桥市

爱知大学

铃木 择郎

池上 贞一

今泉 润太郎

中岛 敏夫

同 启

〔注〕訪問各地の関係者に対する礼状。

先生：

我们此次承贵校招待前趋，受到您的无微不至的关照，关于中日大辞典又蒙亲切而准确的指教，实在感谢不尽了。这不但对于中日大辞典大有益处，而且对于我们也是很大的教育。将来如能通过中日大辞典，对于中日友好和中日文化交流有所贡献，那就是您亲切指教我们的效果，又是可感谢，又是可庆贺的事了。我们已于七月五号下午抱着无限的幸福情绪安然回校，当时对各报记者将访华经过和观感报告，第二天再在校内开会，对教职员，学生报告一切，我们这回访华旅行就此圆满结束了。特此报告，并且表示深切谢意！以后还请时赐教益，是所至盼！敬祝健康！

一九七三年八月 日

爱知大学访中学术代表团

铃木 择郎

池上 贞一

今泉 润太郎

中岛 敏夫

同 启

〔注〕南開大学等訪問大学宛の帰国挨拶。

6-2 b (3)

南开大学革命委员会主任卢治斌先生：

此次，我校铃木择郎教授、池上贞一教授、今泉润太郎助教授、中岛敏夫助教授等四名承贵校邀请前赴，受到无微不至的关照优待和宝贵的教益，感激不既。又承贵校相赠贵重书籍四种，感谢不尽；自当永久收藏于图书馆，使学者受到裨益，永沾厚情。铃木教授等已于七月五日安然回校，请勿悬念！

至于铃木教授曾向贵方所提的四项提议，谅已承同意。如承同意，不仅是我们爱知大学之幸，也是对于中日友好、中日文化交流更进一步的发展很有益处的。兹将四项提议全文再录于下面，以示信实，请鉴谅，是幸！敬祝健康和贵校的发展！

爱知大学向南开大学提出的四项提议

- 1，爱知大学欢迎南开大学教授访问日本。期间为二周，时期一听贵方之便。在日本国内的一切费用，概由爱知大学负担。
- 2，互相进行教授的交流，就是互相帮助教授到对方国去，逗留一段时期从事研究。
- 3，互相进行学生的访问旅行，或者短期的逗留学习。对于这种旅行或学习，我们大学互相予以适当的帮助。
- 4，加深研究上的交流，进行研究资料、出版物的交换。对于中日大辞典，以后还请指教。

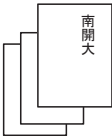

1973年8月 日
爱知大学学长

〔注〕南開大学宛の礼状。四項目の提案は事前に愛大当局と打ち合わせた内容である。

<p>スチール (白黒バタン)</p> <p>辞典 UP</p> <p>P-1 歓迎愛知大学 スチール 先生!</p> <p>N</p> <p>3 2 1</p>	<p>スライド</p> <p>辞典 UP</p> <p>T- 出演 W</p> <p>T- 辞典がむすぶ W</p> <p>T- テレリポ W</p>	
<p>十三万語が収録されている国内でも高く評価されている中日大辞典。すでに二万冊近くが出版されていますが、五年前完成したこの辞典の編さんに当った豊橋市の愛知大学の先生達が、この程三週間に渡って中国を訪問。この7/5帰国しました。</p>	<p>〈TH〉 ―― 〈 〉</p>	<p>7/11 13.20 - 35 TVリポート 愛知の話題 辞典がむすぶ 日中友好 --愛知大学訪中団に きく--</p> <p>出演 鈴木沢郎 池上貞一 今泉潤太郎 中島敏夫</p>

<p>以下「カメラ」 アドリブ</p> <p>T- 南開 W</p>	<p>P-5 南開大 スチール (白黒)</p>	<p>P-4 地図 N</p>	<p>FS</p> <p>アナ 1S T- アナ W</p>
<p>○ 学術・研究の交流、意見交換</p>	<p>○ 43年刊行の辞典の改訂、資料収集</p>	<p>○ 五都市、三大学</p>	<p>訪中のねらい、目的は</p> <p>出発が6/15...訪問した都市と大学は</p> <p>そこで今日は、この中日辞典がとり結んだ今回の中国訪問の成果を先生方に伺います。</p> <p>今回の訪中は、中日辞典の改訂にともなう資料収集、及び中国に於ける日本語教育の現状など、視察したいと云う事で二年程前から希望していた中国訪問の願いがやっとかなったものです。</p>

6-2 c

<p>辞典UP めくる…</p>  <p>カラーズチル (スライド)</p>	<p>まず 辞典の利用、評価について</p> <p>○全般的に… 日本人ばかりでなく、中国人民に役立つ… …関心持つ…交流のために非常によい…</p> <p>○話し豊富、注釈 親切</p> <p>○発音、話し言葉重視、略字の使用 …現代中国の基準にのっとり、正確。 人民の気持にひたり…</p> <p>○コンサイス版…作っては…</p> <p>○新旧、言葉のせている…</p> <p>43年、完成と同時に1700冊中国に送付したという事だが、利用状況は…</p> <p>○各大学に…</p> <p>○バスの中の話、見かけた女性…</p>
<p>P-6 文字 N</p>  <p>文字ボタン</p>	<p>○具体例</p> <p>○その助言に対する姿勢、用語に於ける特徴 政治、歴史、用語…</p> <p>そうした高い評価の中で受けた指摘、忠告、助言…どんなものか</p> <p>ところで、交流の手がかりをつかんだこの辞典の刊行されるまでの歴史を振り返ってみたいのですが…</p> <p>○辞典の編さんに取りかかったのは、かつて中国大陸にあった愛大の前身東亜同文書院…30年前の昭和七年…</p>

<p>P-7 ステール 構内 拍手 (白黒) N</p>	<p>スライド 人民 大会堂 T- W 人民日報 記事 きいている 若い先生たち インサート</p>
<p>○上海、復旦大学でのレポート 最近の中国の日本諸教育、状況どうか</p>	<p>○その後の経過 戦火強まり…中止、カドト残して 同文書院解散… ○再編纂のきつかけ 昭和29年の訪中に託したこと…回答 「返還するのではない、日本人に文化交流のために…改めて贈る…」 …そして引きついた愛大 ○再編纂に要した費用、検出… ○そうした努力の後にむくわれた訪中 中国側の招待…姿勢… 中日友好に寄与…</p>
<p>P-9 ①… ②… ③… ④ N スライド インサート</p>	<p>P-8 聖書みる 先生 ステール</p>
<p>○四項目提案 学術文化の交流促進する立場から… (説明)</p> <p>…参考になった… ○辞典改訂に限らず中国人民の物の考え方 今回の訪中が今後に果す役割…</p>	<p>○日本語放送のこと、テキスト …学習熱 高い… ○古典の徹底研究 源氏物語、万葉集の完訳… ○文字の簡体化…郭沫若の話</p>

<p style="text-align: center;">T- お知らせ N</p>	<p style="text-align: center;">車内から T- 終 W</p> <p style="text-align: center;">スライド 教迎の人 T- サブ W</p> <p style="text-align: center;">T- 出演 W</p> <p style="text-align: right;">辞典…</p>	
<p>注 一九七二年七月十一日 十三時二十分～十三時三十五分放映のNHK TVレポート、愛知の話題「辞典が結ぶ白中友好」愛知大学訪中団にきくのTV放送用コネ（NHK名古屋局作成）なお、このテレビは録画が無く、未収録。原稿も保存されていない（NHK名古屋放送局視聴者センターによる）</p>	<p style="text-align: right;">TM ∩ ∪</p>	<p style="text-align: center;">〇まゝ</p>